

神戸研究学園都市における大学と  
地域コミュニティとの連携の可能性

大野 眞緒

[指導教員：武庫川女子大学教授 三好 庸隆]

キーワード：ニュータウン、大学、コミュニティ、地域活性

## 1. 研究の背景

近年、少子高齢化によるニュータウンのオールドニュータウン化が問題となっている。終戦直後には、住宅不足に対処するために、多くの住宅が建設されていった。その結果、高度経済成長期には、大都市への人口の一大集中が起こり、大都市の近郊を中心に大規模なニュータウン建設が進んだ。同一世代の住民が短期間に大量に入居するニュータウンでは、他の地域に比べて短期間で少子高齢化が加速していく傾向がある。現在、日本の人口は2004年12月をピークに減少に転じ、さらに加速が進むと言われている。

## 2. 研究の目的

本研究では、西神ニュータウンの1つである、神戸研究学園都市に着目した。学園都市はニュータウンの中でも、5大学1高専を持つ学生の街であり、若者が溢れる。大学があることで、地域住民と若者との交流が容易にできるのではないかと予想される。しかし、学園都市で生まれ育った筆者としては、大学と地域とのコミュニティの連携を感じる場面が多くあるとは言えない。この問題を考えるうえで、学生と住民とのコミュニケーションに着目し、今後の街全体の方向性について考えたい。

### 3. 研究方法

まず初めに、学園都市の当初の建設計画を文献調査する。次に、5つの大学やUNITYに、ヒアリング調査又はアンケート調査をお願いする。実際にヒアリング調査を行ったのは、UNITY、神戸市外国語大学、神戸芸術工科大学、流通科学大学である。神戸市看護大学と兵庫県立大学へは、アンケート調査を実施した。調査実施時期は2017年7月～11月である。

#### 4. 神戸研究学園都市建設経緯

#### 4-1 神戸研究学園都市の建設計画

西神ニュータウンは、西神住宅団地、西神南ニュータウン、神戸研究学園都市の3つの地区から成り立つ。全国初の職住近接のニュータウンであり、それぞれの街に工業団地が隣接している。3つの地区の中で、学園都市は、教育・学園・研究施設の役割を持つように計画された。275haの事業区画に対し、計画人口は2万人と設定され、昭和55年に建設が始まった。学園都市建設の基本方針には、「地域主義の指向」「生涯教育への接近」「国際性の追求」の3点が掲げられ、神戸の教

育上の課題に対応すると同時に、市民への教育の活動の場を提供しようとしたことが伺える。1986年発行の、『第3次神戸市総合基本計画』では、「市民に開かれた大学」としての拠点になるように働きかけると明記された。

#### 4-2 神戸研究学園都市への大学設置の取り組み

神戸市に大学を設置することが決まった 1978 年では、関西圏の教育機能の少なさへの改善、特に神戸市西部から東播磨を強化するべきであると考えられていた。

学園都市へ導入する大学については、総合大学1校ではなく、複合型の大学群構成にするとした。学部については、兵庫県に必要な学部を設置することとし、「社会科学・国際科学系」「理・工学系」「芸術・教育系」の3つの分野に決まった。

施設の配置については、住宅施設が学園施設等で分断されることがないようにした上で、学園関係者と地域住民の交流を確保、促進出来るような構成とした。南北には、「学園通り」を設け、学園都市の名にふさわしいまちづくりが目指された。

#### 4-3 UNITY 設置への取り組み

UNITYとは、大学の共同利用施設（神戸研究学園都市大学交流センター）のことを指す。学園関連の共同施設の集約化と、住民と大学関係者とのコミュニティの場とすることを目的としている。1995年に発生した、阪神淡路大震災の影響もあったが、1999年3月25日に完成した施設である。

## 5. 神戸研究学園都市の現状

## 5-1 地理・人口



図1 神戸研究学園都市の地図, 2015年

神戸研究学園都市は、兵庫県神戸市西区に属する。電車で、大阪から1時間、三宮から23分の距離に位置する。

1990年から2015年の人口と世帯数を、国勢調査より調べた結果、学園都市全体の人口は増え続けていることが分かった。現在も新しいマンションが建設されていることから、人口が増加しており、今後も続くのではないかと考えられる。

## 6. 大学へのヒアリング等の調査結果

### 6-1 ヒアリング等の目的と方法

学園都市内の各大学が、「地域に開かれた大学」として機能しているかについて調べる。

調査方法は、ヒアリング調査を主とする。①学生の生活状況②大学と地域との連携・交流③学園都市内の各大学との連携・交流④今後取り組むべき課題の4項目を軸として、調査を実施した。

### 6-2 調査結果のまとめ

学園都市内の大学全体で、9736人の生徒が在籍し、大学の関係者も約900人（予想）が働いていると分かった。

表1 学園都市内の大学に在籍・勤務する人数, 2017

(人)	全校生徒	教員数	職員数
神戸市外国語大学	2186	87	167
神戸芸術工科大学	1696	102	55
流通科学大学	3397	108	155
兵庫県立大学	2051	95	53
神戸市看護大学	406	-	-
合計	9736	392	430

表2から、下宿生数は、神戸市外国語大学を除き、全校生徒に対し3割前後ということが分かった。しかし、学園都市に下宿している学生は、かなり少ないことが分かった。家賃が高い、学生が住めるマンションが少ないことが理由として多く挙げた。

表2 学園都市内の大学に通う学生の中での下宿生の割合, 2017

(人)	全学生数	下宿生数	学園都市在住者
神戸市外国語大学	2186	1187	*270
神戸芸術工科大学	1696	469	*178
流通科学大学	3398	980	72
兵庫県立大学	2051	-	80
神戸市看護大学	406	約120	少数

\*の箇所は、神戸市西区に下宿している学生の数である

市民講座は、すべての大学が行っていた。しかし、大学によって開講数や参加者の差が大きく、また、参加者も60歳以上がほとんどであることが分かった。

5大学間で行われている単位互換制度では、専門性が高い講座であるほど、参加者が少ないことが分かった。大学が隣

接している利点を生かせていないように感じた。

UNITYについては、単位互換授業への新鮮味のなさ、共同研究交流事業へのテーマの幅の狭さが問題点として挙げた。また、地域住民への認知度の低さも課題であると考えた。

## 7. 神戸研究学園都市への提案

### 7-1 課題の抽出

調査結果から、①学園都市内の大学が「市民に開かれた大学」であると言い難い②学園都市内の5大学の連携があまり見られない③学生や教職員のための住宅が少ない④「学園通り」が計画通りに機能していない⑤UNITYの特色を活かしていないように見受けられるという、問題点が挙げられた。

### 7-2 提案

#### (1) ソフト面での提案

それぞれの大学を身近に感じてもらう必要があると考え、提案を行う。

- ① 学生のUR住宅や神戸市営住宅への入居を促す
- ② 学園都市内大学図書館利用システムを作る
- ③ 単位互換講座の講座内容を見直す
- ④ シェアハウスを作る
- ⑤ 市民講座の講座内容を見直し、駅でも宣伝を行う
- ⑥ 各大学の食堂の名物を作る
- ⑦ UNITYの制度の見直し、多くの人の参加を促す
- ⑧ 学生専用のレンタルサイクルを各大学とUNITYに置く

#### (2) ハード面での提案

閑散としている「学園南通り」について、提案を行う。地域住民と学生の両方が利用し、コミュニティが生まれるような場を目指す。

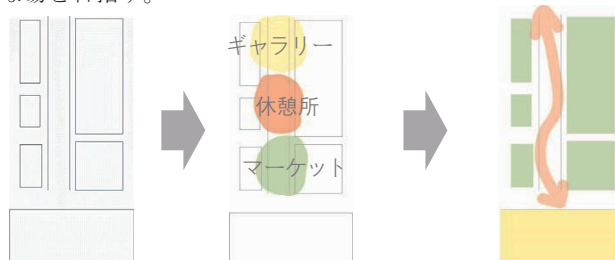


図2 学園南通りの提案

学園南通りは、左右両方住宅に囲まれている。上側に学園都市駅があり、下側には、神戸芸術工科大学と兵庫県立大学がある。提案では、ギャラリーと休憩所と野外マーケットを設置する。学生の利用する場を地域側に、地域住民が利用する場を学校側に設けることで、地域住民と学生の導線が交差する。そうすることで、自然と交流が生まれることを目指した。

### 参考文献

- 1) 大海一雄:『西神ニュータウン物語』, 神戸新聞総合出版センター, 2009
- 2) 神戸市:『神戸市総合基本計画原案』, 1965
- 3) 神戸市開発局:『神戸研究学園都市基本構想』, 1978